

死にそうな
孤鬼こおにでした

転生てんせいしたら

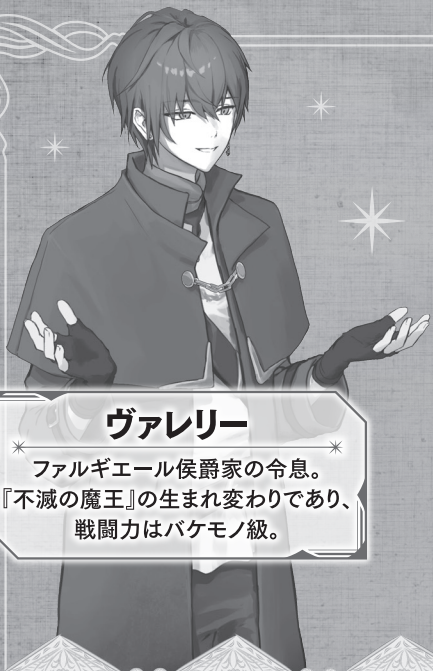
5回ごかい目の人生じんせい

3

Kou Sasaki
佐々木 鴻

iii.でかるこ

Characters



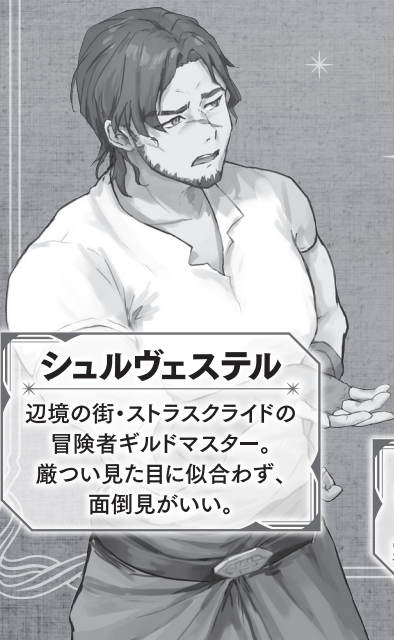
ヴァレリー

ファルギエール侯爵家の令息。
『不滅の魔王』の生まれ変わりであり、
戦闘力はバケモノ級。



フロランス

ヴァレリーの姉。
文武両道なしっかり者だが、
お茶目な一面も。



シュルヴェステル

辺境の街・ストラスクライドの
冒険者ギルドマスター。
厳つい見た目に似合わず、
面倒見がいい。



アーチボルト

ナディの家に憑く、有能な執事精霊。
実はナディの前世の末息子で、元魔族。



デシレア

神域に棲む植物妖精。
神話の時代を知るといふ、
ミステリアスな美女。



まあぶる

ナディの使い魔である、
みかんの人造妖精。
無邪気で負けず嫌い。



レオノール

生まれたばかりの頃、母とともに
刺客に襲われていたところを
ナディに救われた少女。
今はナディの妹分。

一章 姉妹のお家と土地事情

ナデイとレオノールが『結晶鋼道』から帰還した直後、辺境都市・ストラスクライドの冒険者ギルドは騒然^{そうぜん}となった。

三ヶ月以上もの間行方不明になっていた彼女たちの登場に、その身を案^{あん}じていた全員が安堵^{あんど}し、胸を撫^なで下ろしたり、感涙^{かんだい}したりと思いきいに喜びを分かち合う。

（なんだか、いろんな人たちに心配かけちゃったみたいね。私としては、最後の戦闘以外はあんまり大変じゃなかったけど）

自分のことのように喜んでいるみんなを見て、ずいぶんと知り合いが増えたものだとしみじみ思うナデイ。

気が付けば、貧民街の隅で死にかけてから早十数年。そのときに四度もの転生を繰り返していた記憶を取り戻していなかったら、今頃どうなっていたことか。

一回目は、地球からの転移者。

二回目は、災厄竜^{さいやくりゅう}を屠^{ほぶ}った赤金髪^{せきこんぱつ}の魔物狩^{まぶつたい}り。

三回目は、女魔法使い^{めいほうつかい}にして薬師^{やくし}。

四回目は、『不滅^{ふめつ}の魔王^{まおう}』を単独撃破^{たんどくげいぱ}し、その魔王に見初^{みそ}められて妃^きとなった冒険者^{ぼうけんしや}。

そう、ナデイの五回目の人生は、転生したら死にそうな孤児だったところから始まったのだ。当時の彼女はまだ五歳。四度の人生で培った経験を頼りに、魔法を駆使して死の淵から生還したナデイは、とある事情から託された赤子にレオノールと名付け、己の妹分としてともに暮らしている。

実はこの妹分のレオノールは、ナデイの前世——魔王妃だったときに生んだ、早世した娘の転生体であったりするのだが、それはともかく。

出会いから数年後、冒険者となった二人は快適な生活を送ろうと決意した。

そして裏庭には二羽、庭には二羽二トリが飼える理想の家を建てるため、資材を揃えるべくダンジョン——『結晶鋼道』に潜行したのである。

ところがそこで迷宮の氾濫に巻き込まれ、同じく素材を求めて潜行していた冒険者——『不滅の魔王』の転生体、ヴァレリーと出会ったのである。

そこからはなぜか前人未踏の山へ転移させられたり、完全な思いつきで持ち運びできる家を建てたり、植物妖精が管理する神域へ足を踏み入れたり。

(……客観的に、すごい体験ね)

愉快な冒険を経て、迷宮氾濫の原因を解消したナデイたち。その過程で一行は四回目の人生における彼女の末子で、難病に罹患していた魔族……アーチボルトをも救い出した。

(アーチー、私が建てた家が気に入って、執事精霊とかいう妙な種族に進化したけど……あれって進化なの?)

ギルド中の冒険者がナデイとレオノールの帰還を祝った大宴会へ突入する中、ナデイは確実に当初の目的を忘れていて、であろうみんなを感慨深く眺めながら回顧する。

ちなみに、翌朝の結果は語るまでもなく、死屍累々な有様だった。

(戦場でこういう屍が次々と起き上がってきたら、手がつけれないわね……見てみたい気もするけど)

反省はしても後悔しない、同じことを繰り返す冒険者たちを呆れながら遠巻きに眺め、そんなひどいことを考えるナデイであった。

そんな日の昼すぎ。行方知れずだったナデイたちの捜索に協力していた冒険者たち——お揃い鉢巻きの謎集団も、冒険者ギルドに戻ってきた。

ギルドに居合わせた冒険者をも巻き込んで、やはり始まる大宴会。

異様な風体をしたこの集団は一つのクランであり、とある崇高な目的を掲げていた。

主な活動は当然冒険者業であるが、真の目的は他にある。

「我々は！ レオノールさまの非公式ファンクラブ『★レオさま親衛隊★』である！」

「『可愛いは正義』——」

客観的にもナデイの心情的にも、男女混成であるがゆえに許容範囲ギリギリだったファンクラブは、メンバー紹介によってあっさりと閾値を超えた。

クランリーダーは、この街の冒険者ギルドのギルドマスター・シウルヴェステルを凌駕するほど

ガチムチな【補助魔術師】だ。

背中に鬼神……ではなく七歳だった頃のレオノール、通称『ムフーなレオさま』を背負っている変態である。

しかも高級品である映像転写の魔術具を使い、精密に彫り込んでいるという徹底ぶり。

それを見た瞬間、彼の生皮を剥ぎたい衝動に駆られたナディは、傷害罪で捕縛されるのを覚悟で【神装魔法】を発動させ、【刃の翼】を展開した。

白銀に輝く肢体の背に宿る刃が光を乱反射し、舞い散る四色の花卉をまとってあたかも女神が降臨したかのようだ。

そんな彼女は右手を腰に軽く当てて半身になり……

「お前の罪を数えろ！」

左手で敵を指差し、そう宣言した。

その中二心をくすぐる姿に冒険者の一部が驚愕し、感涙に咽び泣いて「ふっ」と呟いていたが余談である。

なお魔術が主流となった現在において、ヒト種の間では失われて久しい魔法——【逸失魔法】を惜しげもなく披露しているのだが、誰もツッコまない。ナディたちに心酔しているこの街の冒険者でなければ、あつという間に大騒ぎになっていただろう。

怒り心頭なナディだが、肝心のレオノールが「実害がないから好きにすればいい」と懐の深さを見せたため、犯行は未然に防がれた。

ナディにしてみればとんでもなく釈然としなかったが。

しかし、変態集団のごとくが身体のごとくに『ムフーなレオさま』のタトゥーをしている事実が発覚した。これにはさすがのレオノールも啞然とするしかない。

変態集団相手に再び罪を犯す覚悟を決めたナディであったが、やはりレオノールが度量の大きさを見せたため、事なきを得た。

そんなことがあった後日。白銀の天使が刺繍された漆黒のお揃いコートをまとい、「ふっ」と呟いては、思い思いの謎のポーズをとるクランが結成された。

一癖も二癖もありそうな野郎どもで構成されたクランは、秘密結社『+聖天協会+』と名乗った。彼らは、目の前に顕現した天使の神性にあてられ、信奉するべくこのような格好になったそうである。

お揃いコートの刺繍は見事なステッチであり、天使の容姿は青みがかった黒髪——濡鴉色の髪に暗紫の瞳をした少女で統一されていた。

ぶっちゃけ、ナディそのものだ。

当の誰かさんは、全力で見なかつたことにした。ギルド内とはいえ【逸失魔法】だけでなく、【刃の翼】を使ったのだ。自業自得である。

そんなナディのもとに、人混みをかき分け、一人の少年が駆け寄った。迷宮氾濫を解決する際に出会い、窮地を救ったオト少年だ。

オトは瑠璃色の卵のような魔結晶を差し出した。

これはナデイが『結晶鋼道』で倒した竜からドロップした素材であり、所有権をオトたちきょうだいに譲ったもののだが……なんでも、換金しようとしてもオトから離れず、譲渡不能なため困っていたのだという。

何事かと調べたナデイは、魔結晶とオトがリンクしているのに気付いた。魔結晶は魔力を微量だが吸収しているらしく、一定量に達したときに何かが生ずる可能性を示している。

明らかに普通の子どもには持たせられない危険物である。そのため、ナデイはオトとのリンクを断ち、魔結晶を自身の【収納】に放り込んで隔絶した。

「頑張ったね。偉いぞ」

ナデイはオトの頭を撫で、大量に持たされていたサブマス作の茶菓子をいろいろ取り出して渡す。ついでに、頑張ったご褒美とばかりに在庫の魔結晶や鉱石なども渡した。特別深い意味はない。飴ちゃんを配るおばちゃんのノリである。

ナデイたちが帰還してからの一ヶ月は、このように騒々しく過ぎ去った。



それからさらに一ヶ月が経った、現在。冒険者ギルドのギルマスの執務室にて。

相変わらずシュルヴェステルに書類仕事を手伝わされていたナデイが、ふと思いついたかのよう

に顔を上げる。

「そうだ。私、土地を買おうと思ってたんだ」

不正に補助金をせしめようとしている申請書類を却下しながら、彼女はそう呟いた。

「いきなりどうした」

顔を上げずに書類に向き合ったまま、自らの妻の一人——スカートレットから紅茶のカップを受け取り、シュルヴェステルが聞く。平然とした問いかけにも見えるが、彼は内心で警戒していた。

ナデイが口元に薄く笑みを浮かべ、半眼で遠くを眺めるように視線を宙に漂わせる。

「『結晶鋼道』の騒動から、一ヶ月が経過した——」

そして、モノローグっぽく語り出した。

「いや、マジでどうした。突然語り出して」

処理が終わった書類を積み上げ、既視感を覚えつつもシュルヴェステルが聞き返す。

「あのときの混乱から立ち直った私とレオは、無事に平穏な生活を送っている」

右手を胸に当て、左手の平を宙に掲げてナデイが続ける。その表情は穏やかだ。妙なポーズは継続中だが。

「……平穏、ねえ。まあ、ある意味で平穏なのか？ 最初の一ヶ月は、迷宮に潜つちまう発作も起きなかったようだしな」

わりと大人しかった姉妹を思い出して、シュルヴェステルは再び書類に目を通していく。

「あのときの混乱はひどかったわね。毎日がお祭り騒ぎだったし、妙な連中が妙なことを言い出す

し……」

連日、昼夜を問わずに開催された宴会を思い出し、ため息をつくナデイ。あれは間違いなく、理由をつけて酒を飲みたかったただけだろう。

酒を飲めないナデイに、酒飲みの気持ちは分からない。だが、めでたいと思ったときは飲みたくなるのだろうか？と予想はできる。共感はないが。

そんなことより。

話しているうちに、ギルドに飾られていたとあるものが脳裏をよぎって、ナデイは洗面を作った。「一番ひどかったのはあのタペストリーよ。絵画として見事なのは認めるけど、どうしてモデルが私なのよ！ 行く先々で妙な二つ名で呼ばれて、全然気が休まらないじゃない！」

迷宮氾濫に際して、オトたちをはじめとする子どもを助けるべく、竜を倒したナデイに付いた異名『剣花の天使』。

その活躍を称えるタペストリーを思い出し、ナデイは歯噛みした。しかも、図柄違いで三作品もあるのだ。

「あー、アレかあ。まあ、仕方ねえんじやねえの。詳しい状況は知らんが、子どもを助けたのは事実なんだろう。だったら甘んじて受ける。『剣花の天使』？ プフウ！」

噴き出したシウルヴェステルを睨み、ナデイは呟く。

「く……だから鬱憤が溜まりまくって、思わず迷宮に潜っちゃったわ。楽しかったわね」

「ああ……マジで何やってんだろうなあ、バカなのかなー、迷宮で遭難したのに学ばねえなと思っ

たぞ。だが、オメイにしちゃあ一ヶ月も我慢したのは上々なのか？」

本来であれば、迷宮での遭難は重大事だ。生還したとして、それがきっかけで冒険者を廃業する者も少なくない。

だが、ナデイとレオノールには適用されないようだ。

「ええ、私は過去を振り返らない。見据えているのは、未来だけなのだから！」

そう言った彼女は、テーブルに足をかけ……ようとして行儀がよろしくないことに気づき、咳払いをしてから、足を組んでどこをともなくピシッと指差す。

どちらにせよ、行儀が悪いのに変わりはない。

「カッコよく決めているところ悪いが、過去の事案から学ばないバカだなーって感想しか出てこねえ。つーか、前もオレ、同じことを言っただが気のせいかな？」

間違いなく同じことを言っていた。しかしナデイは、そんなちっちゃいことなど気にしない。

「ま、迷宮から素材を仕入れて売りさばいて、経済を回している私は、辺境伯に感謝されてもいくらいよ。そのうち勲章を賜るかもね」

澁瀬と、すごくいいことをしたとばかりにナデイが胸を張って誇らしげにする。

シウルヴェステルは、ジトツとした視線を向けた。

「感謝してねえから勲章なんか授与しねえぞ。そんなことをやらかすヤツがいるっただけで、頭痛と胃痛に苛まれているからな。マジでやめてほしいわ」

まるで見てきたかのように語るシウルヴェステル。彼も頭と胃のあたりを押さえていた。

そんなギルマスなどどこ吹く風で、ナデイが続ける。

「迷宮産の素材は貴重だからね。しかも深層に潜ってレアな魔物を狩って、その素材をしっかりと持ち帰っているし。えーと……うん、どこに潜ったかなんて重要じゃないわ」

「どこって……この周辺の迷宮、具体的には『妖魔洞穴』『獣妖遺址』『神樹呪森』とか、ずいぶんと荒らし回ってくれたじゃねえか」

「ふふん、私とレオにかかればなんの問題もないわ。むしろ物足りないくらいよ」

【深層主】を倒すと魔物が湧かなくなつて他の冒険者が稼げないからやめろつて言つたら、きっと最深層まで綺麗に掃除しながら潜りやがって。なんで根刮ぎ狩りまくるんだよ、引くわー」

一般的に、迷宮は【深層主】を倒すと一定時間エネミーが一切発生しなくなる。これを「踏破」という。

「少し前のトレンドは、『神樹呪森』でワンダリング・トレントをどれだけ効率よく倒せるか、だったわね。あの迷宮って、【深層主】を倒しても通常どおり湧くのがいいわ」

「その『とれんど』つっーのはよく分らんが、とにかく。徘徊して位置が固定していないボスを効率よく倒すとか……全然普通じゃねえことをしでかしている自覚がねえのかよ。つたく、頭痛えな」

無茶苦茶ぶりに呆れて頬杖を突くシウルヴェステルをよそに、ナデイは閃いた。

「ふふ……『トレント』を狩るのが『トレント』よ！ ふふう」

噴き出しつつドヤ顔で宣言し、一人でくつつつ笑っている。

「……いや、知らんし」

ポロツと出るナデイの地球ジョークが、まったく理解できないシウルヴェステルだった。

「ワンダリング・トレントの木材があればほど高額で取引されるのは意外だったけれど、量を卸したから価格が下がったのよね。庶民の財布に優しい価格設定。ふふん、いいことをしたわ」

「経済をぶっ壊すのはいいことじゃねえ。高級品がどうして高価なのかを理解しろよ。適正価格に戻すための各方面への根回しとか国外への流通とか、マジで大変だったんだぞ」

「それでも余った木材で、貧民街の教会を建て直してやったわ。もちろん寄付金を横領していた管理人のアル中修道女は追い出したわよ」

「聞いちゃいねえ……」

相変わらずなナデイの語りにシウルヴェステルはため息をつく。

「……って、おい待て」

だがしかし、おかしな情報が耳に入った。

「聞き捨てならねえ話がポロツと出たぞ。教会って、街の東門から出た先の貧民街にある、孤児院を兼ねた施設か？ あそこには孤児が三十人は生活できる額の寄付金を毎月送っている。管理人の修道女には年一回の現金出納帳の提出を義務つけていて、問題なく運営できているはずだぞ？」

辺境都市では孤児院やそれに準ずる施設が正常に運営されているかの確認を、最低でも年一回は行っている。収支決算や現金出納帳を提出させるのもその一環だ。

なお、これは貧民街だけではなく、市街の施設でも同様である。

「はん、書類なんていくらでも偽造できるでしょ。なんで抜き打ちで立ち入り調査をしなかったのよ。脇が甘いわね辺境伯も。まったく、やれやれだわ」

肩をすくめて目を伏せて、首を振りながらそう言うナデイであった。

「その『やれやれ』はちとイラツとするが、まあ、そうだな……」

上から目線の「やれやれ」に頬をわずかに引きつらせるが、シュルヴェステルは一度息を吐いてから気持ちを整えた。

ギルドマスターともなれば、貴族と渡り合う場面も少なくない。この程度で腹を立てていたらキリがないのだ。

「貧民街の住民は、その土地に勝手に住み着いている連中だ。市民じゃないから税が取れん。薄情だが……本来なら税を払わない者を保護する義務はない。それでも、孤児を保護しようとしたアルノルト——辺境伯を悪く言うのは勘弁してくれ」

よつて、ナデイの軽口にいちいち腹を立てたりしない。気に入らないのは事実だが。

代わりに、彼女に任せる事務仕事を倍に増やそうと画策するシュルヴェステルである。

難なくこなされる気もするが、それはそれで助かるから問題ない。自分の負担が減るし。

「……そうね、貧民街の住人つてそうだったわ。さっきの発言は私が浅慮だったみたい。ごめんさいつて言っておいて」

ここでの会話が辺境伯にダイレクトに伝わるわけではなかるうが、それでも謝罪する。

珍しく素直な反応のナデイに、「成長したんだなあ」と思わず温かい目をするシュルヴェステル

だった。

向けられた本人はスカーレットから紅茶のおかわりをもらっていて、まったく気付いていない。

「それで、聞きたいのだけれど。貧民を見逃しているのは、あえてつてことかしら」

クピーツと紅茶を飲んで満足げに息を吐いたナデイは、真剣な表情で確認した。

とはいえ、さほど関心はない。そもそも貧困の問題を個人でどうこうできるはずもないし、できると思うほど自惚れてもないからだ。話の流れで聞いただけである。

「そういうことだ。現状を変えたいつて貧民街からのし上がるヤツもいるし、そういう上昇志向な人材は貴重だからな。オメーみてえに」

まさか褒められるとは思っていなかったナデイは、ちよつと気恥ずかしくなった。居心地悪そうにそわそわする。

シュルヴェステルとしては褒めたつもりなど一切なく、ナデイが孤児でありながら冒険者として名を馳せつつある事実を述べただけだ。

彼はちよつとした人たらしであった。

もつとも無自覚なので、傍で聞いているスカーレットが困った顔をしていたのだが。

「……ふ、ふん、褒めたつて、書類仕事の手伝いくらいしかしてやらないんだからね」

「十分すぎるくらい助かっているんだが」

不機嫌そうに言い返すナデイに首を傾げ、シュルヴェステルは怪訝な表情をする。

「とにかく。孤児院は私の知人——アガータさんの元仕事仲間が管理していて、孤児たちも以前と

は比べ物にならないくらい幸せに暮らしているわ。本当に、アガータさんに感謝ね」

アガータは、新生児であつたレオノールをナデイが保護したときに母乳を分けてくれた女性だ。そんな彼女は貧民街に住んでいた頃のお隣さん、オットと所帯を持った。

性格はぶつきらぼうで人に厳しいが、それが一つの愛情の形であるのをナデイは知っている。

彼女の元仕事仲間もさまざまな事情を抱えており、大変な苦勞をしていた。

苦勞をしているからこそ、人に、特に子どもたちに優しくできる。元の管理人と比べることすら失礼だ。

「あ。そういうや管理人の修道女を追い出したって聞いたが、マジか？」

「大マジよ。子どもたちに名前も付けずに『おい』だの『あれ』だの『それ』だので呼んでいたあのアル中なクス修道女。ぶん殴って追い出してからぶん殴ったわよ。あのとき、いつか殴るって決めていたしね」

「ぶん殴ってって……何か恨みでもあつたのか？」

「あつたわよ。私、その孤兒院にいたから」

それを聞いたシュルヴェステルは、思い出して怒りに震えるナデイをじっと見つめた。

「え？ ちよ、何よ」

「いや、オメーも苦勞したんだなあって思つてな」

温かい視線で苦勞をねぎらうシュルヴェステル。ちよつと目が潤んでいる。

ナデイの、普段は欲望の赴くままにしか見えない行動の端々に垣間見える人への優しさに、彼は

ほっこりしていた。思考がほぼお父さんである。

「つーか、ぶん殴って追い出してからさらにぶん殴ったように聞こえたが、気のせいかな？」

「ん？ 気のせいじゃないわよ。ほら、教義にもあるでしょ。『右の頬をえぐるように殴ったら左の頬もえぐるように打つべし！』って」

「知らねえわそんな物騒な教義。どこの宗教だよ」

「そんなの私を知るわけないじゃない」

「言いたいだけじゃねえか」

ほっこりが急激に冷めるシュルヴェステルだった。

「と……にかく、木材の残りは貧民街の廃材置き場に置いといたわ。これで住民が家屋の倒壊を怖がらずに安心して休めるわね」

そして次の発言に、ほっこりした気持ちは完全に吹き飛んだ。

「おい、貧民街のどこに何を置いたって？」

「あら、聞こえなかつたの？ 銃火器とかの爆音を頻繁に聞いていると耳が遠くなるそうよ」

「聞こえなかつたんじゃないわねえわ、確認だ。どこに、何を置いたって？ キリキリ吐け！」

「なんなのよ、まったく。貧民街の廃材置き場に置いといたのよ、ワンダリング・トレントの木材を」

貧民街の廃材置き場は、不要品の廃棄場所だ。中にはまだなんとか使えるものが残っていることがあるため、それを狙う者も少なくない。

「いやあ、貧民街にも技術者がいるものねえ。みんな協力して、規格は一緒だけど住宅をいっぱい建てていたわよ」

「そりゃあ貧民街の全員がただ食い詰めたわけじゃなくて、事情があつて職を失った技術者もいるだろう……いかん、貧民街の住宅状況改善がいいことなのかそうじゃないのか、だんだん分からなくなってきたぞ。こいつのトンでもなさに慣れてしまうと、常識がぶっ壊れそうだ」

シウルヴェステルの呟きに、スカーレットが何度も頷いている。そんな二人を交互に見て、ナディは不本意そうに膨らんだ。

わずかな沈黙のあと、彼女はまた何かを思い出したかのように遠くを見つめて語り出す。今度は身振りも交えて。

「そうして迷宮でお仕事をして木材を市場に提供して、経済を順調に活性化させた私たちは気付いたの。技術者の育成は急務であり、それを成すことでさらに経済が活性化すると」

「お、おう。間違つてはいねえな。やつていることは滅茶苦茶だが。あとオメーが迷宮に潜るのは絶対に仕事じゃないだろ」

「何を言っているのよ。好きなきときに迷宮に潜つて素材を得る。そして換金する。これが冒険者の仕事じゃなくてなんなの？」

心の底から心外とばかりに、不機嫌を隠そうともせずナディが言う。シウルヴェステルは露骨に呆れた。

「趣味か、金稼ぎか、あるいはドロップ品狙いのギャンブルかだな」

「失礼ね。私たちは迷宮に潜つてお宝や素材を集めるのが好きなだけで、趣味じゃないって何回も言っているでしょ」

「完全に趣味じゃねえか。こつちも何回も言っているぞ」

「それに、ギャンブルだなんて心外だわ。より良質なドロップを求めて頑張っているだけよ」

「……発想がギャンブラーなんだよなあ」

ツツコミどころが多々あるナディの言い分に、シウルヴェステルはげんなりしながら冷めてしまった紅茶を口に含む。

何を言っても無駄だとは内心分かっているものの、言わなければ彼女はより無茶をしそうだ。まあ、そんな他愛もない会話を楽しんでいるのも事実だが。

ナディが頬を膨らませる。

「……さつきからうるつさいわね。なんで私のモノローグにいちいちツツコミを入れてくるのよ。そりゃあシルヴィのツツコミテクは秀逸だつて知っているけど、気持ちよく感傷に浸っているんだからスルーが礼儀でしょ。作法がなつてないわね。まったく、これだからガチムチは！」

「ガチムチ関係ねえわ。何言つてんだコイツ。モノローグをなんで盛大に口に出してんだよ、脳内に収めるや。まったく感傷に浸つてなんかいいえし。相変わらず本つつつ当面倒臭えな！」

……そして親子喧嘩のように、二人は採めた。

憂いを帯びた、わずかに垂目な暗紫の瞳を伏せ、ナディが呟いた。

「ねえ、シルヴィ。私たち……私とレオって、そのあたりにいるごく普通の姉妹となら変わりのいわよね」

「どの辺にお前らみたいな姉妹がいるのかは不明だが、容姿のよさや突飛な行動を含めて一般的な範疇からは逸脱しているからな。よその姉妹と一緒にするな。一緒にされるほうが啞然とする」

黙っていれば美少女と呼べるだろう、まだ幼さが残った容貌の彼女を真顔で見つめ、シルヴェステルは褒めているのかいないのか微妙な言葉を返す。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「ちよっと、それってどういう意味よ。まるで私たちが非常識みたいんだけど」

『みたい』じゃなくて十分に非常識だぞ。どこをどう見たら『普通の姉妹となら変わらない』と言えるんだよ」

「どこって、見たら分かるでしょ。そりゃあ私とレオは血が繋がっていないけど、どこからどう見てもその辺にいる仲良し女魔法使い姉妹じゃない。ほら、一般的で常識的でしょ」

「世の常識に真正面から喧嘩を売ってんじやねえ。そもそも魔法は逸失しているって何度言わせるんだ。珍しいどころか、本来なら存在すらしねえからな。せいぜい『自称』でしかなくて、ほぼ詐欺師なんだぞ」

ときどき出没する自称魔法使いを思い起こし、うんざりするシルヴェステルである。

ナデイたちが現れる以前からそういう輩は一定数いたが、それでも年に数度遭遇すれば多いほうだった。

（四回目の人生から二百年以上が経った今、魔法はマイナーになってしまったのよね。やつぱりシルヴィを巻き込んで講習会を開くか教本を提供するかしようかな。そうすれば失われた魔法もしっかりとした地位を得られるはずよ）

ナデイは真剣に考え、地位が向上した魔法を自由に使えている光景を想像してニマニマする。

それを見たシルヴェステルは、なぜか悪寒がして身震いした。

ナデイがそんな表情をするときは、決まってよからぬことを考えているからだ。

「まあ、それはあとの楽しみにしておくわ。ところで、シルヴィにお願いが——」

「待て。何を『あとの楽しみにしておく』つもりだ？ 悪い予感しかしねえぞ」

胃痛悪化の原因にしかならないであろう、不穏な発言を追及するシルヴェステル。

だがそれをとてもいい笑顔で華麗にスルーしたナデイは、処理が終わった書類を丁寧に整えた。

そして紅茶を飲み干し、短く息を吐く。

「シルヴィにお願いがあるんだけど。私たち、そろそろ家を置く土地が欲しいのよ。市街で、できれば周辺住民が少ない場所がいいわ」

「ん？ おお、そういえばそんなことを言っていたな」

ナデイの頼みにしてはまともで、シルヴェステルは胸を撫で下ろす。おかしい一文には気付か

なかったようだ。

だが、油断はしない。いつ、どこで、とんでもない要求をぶつ込まれるか分からないからだ。

「住民が少ないところ、ねえ……いいの？ 住民が少ないということは、商店もないことだぞ。店が遠いと買物が大変だから、ミミやロツティは多少騒がしくても近場で買物ができるほうがいいと言っていたが」

妻の二人——ミシエル（愛称はミミ）とスカーレット（愛称はロツティ）の名前を挙げてシュルヴェステルが懸念点を伝えると、ナデイは顔をしかめた。

「うーわ、またしても惚気のめけるとか。どうあってもシルヴィは二人が大好きなのね」

「あん？ んなの当たり前だろ。嫁よめさんが大好きじゃないヤツはこの世に存在しねえ」

真剣な表情で惚気を重ねるシュルヴェステルだった。照れたスカーレットに背中をズドム！ とぶっ飛ばされたが、小揺こゆるぎもしないのは相変わらずである。

「あ、うん。シルヴィの惚気とロツティさんの肩甲骨けんこうこつを粉碎ふんさいしそうなツツコミは無視することにするわ。砂糖さとうを吐きそうだし。えーとねえ、私たちが重視しているのはそういう利便性じゃないのよ」

頬を赤くし、ウキウキで紅茶のおかわりを注いでいるスカーレットと、それを受け取ってわずかに笑顔を向けるシュルヴェステル。イチャラブが普段の三割増しだ。きっと、相手がミシエルであつても同じであつたらう。

これにはさすがのナデイもげんなりした。普段はシュルヴェステルを困らせてはゲツソリさせているのに気付いていない。「利便性重視じゃないなら、土地の候補はわりと多いかもな。ロツティ、売地の資料を、そうだな……一般と公有の両方を持ってきてくれ」

何事もなかったかのように話を戻したシュルヴェステルが、資料を持ってくるように指示を出す。

スカーレットも同じく、何事もなかったかのように書棚にある資料を探し始めた。

（公私の区別はしっかりしてる。腐くさってもギルマスね。シルヴィは腐くさってないけど）

相変わらず、シュルヴェステルへの評価が高いナデイである。なぜ冒険者ギルドにそんな資料があるのか、という謎には気付かなかつた。人通りが少ないということは、それ相応の危険要因があるんだぞ」

なんだかんだ言いつつも、シュルヴェステルは姉妹を心配している。辺境都市でも指折りの優秀な冒険者である二人には、十分な安全対策を取ってほしいと常々考えているのだ。そして十分に考えて、自制心を持って行動してほしいとも、ちょっとだけ思っている。

具体的には、先の発言に占める割合の八十五%くらいはそんな気持ちだ。

「大丈夫よ。安全対策はしているし、家には執事執事がいるから」

「そうか……その『執事がいる』というのはイマイチ分らんが、対策をしているなら止めなぞ」

「それに……理・解・し・た・く・ない・けど、なーんか私とレオを勝手に警護する連中がいるのよねえ……」
「ん？ ああ、あいつらな……あれでも優秀な冒険者なんだよ。今のところ害はないだろうから、大目に見てやってくれ……」

二人が言っているのは、レオノールの非公式ファンのクランと、ナディイを信奉している秘密結社を名乗っている連中のことである。

「ま、オメーも妹ちゃんみてーに受け入れてやることだな、『ソールスフラワー・エンジェル剣花の天使』？ ふ、く、く、く……」
「……………!?!」

ナディイの異名でからかうシルヴェステル。日頃の仕返しである。

そして仕返しされたナディイは顔を真っ赤にしながら、声もなく両手をふよふよと動かした。

その仕草がちよつと可愛くて、スカーレットが口元を押さえてニマニマする。シルヴェステルはノーリアクションであったが。

「ふ、ふんだ。いつもからかわれているお返しのもりかしら？ そんなものがこの私に通用するとも思っているとは、とんだ笑い種ね！」

数回深呼吸をして気持ちを落ち着かせ、ナディイは腕を組みつつ半眼で見据えて言い返した。

余裕の表情を取り繕っているが、まだ赤面している。耳まで真っ赤だ。

「……いや、オメーに意味不明なリアクションをさせた時点で効果抜群だろう。いたずら娘よろしく人のことをからかっているわりには、反撃に耐性がないんだな」

「!? はうう……」

淡々とド正論を突きつけるシルヴェステルに反論できず、ナディイはまたしても両手をふよふよさせる。

「ともかく」

年齢相応に可愛い行動をしつつ、どうやって反撃してやろうかと考えている彼女をよそに、シルヴェステルが話題を戻す。

「オメーが希望しているような土地はわりとあるぞ。開発が中断された荒地地だったり、開発自体がされていない雑木林ぞうきばやしだったりとかだが」

「……開発が中断されている土地はともかく、なんで市街なのに未開発の雑木林があるのよ」
「そりゃあ、都市化計画をする際に規模の設定をするからだろう」

ナディイの素朴そぼくな疑問に、シルヴェステルはスカーレットから受け取った辺境都市の全景地図を広げながら答えた。

「ええ、そうね。まず都市をどれくらいの規模にするかは重要よね」

「だろう。ここは辺境都市と呼ばれるだけあって、グランツ王国北東の端に位置する。以北はラフロイグ山地という完全な未開の地で、厳しい環境だからどんな種族も住んでいない。数百年前には都市があったが、現在は滅ほろんで迷宮化した都市遺跡になっちまってるからな」

「へえ。そんなに厳しいところに都市を作ったんだ。どうして滅んじやったの？」

もともと辺境都市の土地について聞いていたはずが、ナディイは遺跡に興味を引かれて脱線する。

「なんでも、『不滅の魔王』とヒト種の戦争——魔王戦争後に国を追われた貴族がいて、それに連

なる者どもが作った都市だったようだ。山地の峡谷を強引に魔法で均して平地にしてな。立地的に鉱石の採掘が盛んで、一時は交易も活発に行われていたらしい」

速攻で脱線するナデイの質問に、流れるようにすらすらと答えるシルヴェステル。

軌道修正しないで語り始めた夫を見て、スカーレットがちよっと困った表情を浮かべていた。

「え？ ふうん、そう……なんだ」

そんな彼の話に、ちよつとだけ心当たりがあるナデイであった。

前世の彼女は魔族との戦争に参加させられていた。

大言壮語を吐いて戦場に出向いたものの大した戦果を上げられず、取り潰された家門や行方不明になった貴族が結構いた記憶がある。

「だがいつの頃からか野心に目覚めたらしく、祖国に侵攻する準備として交易路を塞いで備えたらしい。砦を作るとかではなく、山を崩して。結果、交易ができなくなって滅んだ」

「……バカなの？」

野心を持つて侵攻作戦を立てるまではまだいいとする。

しかしその前準備として、生命線ともいべき交易路を文字どおり塞いでしまつては本末転倒だろう。

「『方法を間違えたんだらう』と、歴史学者は言っているぞ」

「歴史学者じゃなくても、誰しも思うわよ。まったく、当時の貴族連中は実力がなくせに矜持ばかりを語る愚か者揃いね」

ナデイは久し振りに前世に想いを馳せた。

「何様目線で語っているのかはさておき。辺境都市・ストラスクライドが作られるにあたり、まず築城のための五方陣形の城壁が築かれた」

「そういうえば、この領主城の城壁ってユニークよね。相手の攻撃手段が砲撃メインなら、まず陥落しないんじゃないかって思うわ。まるで五稜郭ね」

「その『ごりようかく』つてのが何かは知らんが、陥落しにくいのは確かだ」
意味不明な発言があれど、聞いても理解不能だとばかりに話を続ける。賢明な判断だ。

説明を聞き、ナデイは頷いた。

「領主城を中心に城壁を築いてから都市を作り始めた。だから都市の範囲に荒地や雑木林が含まれてしまったというわけね。理解したわ」

「そんなところだ。相変わらず理解が早くて説明がラクだな。要所で脱線するが」

「脱線しても、あなたがしっかりと説明してくれるじゃない」

そう言い、二人はニヤリと笑い合う。

はたから見ているスカーレットが、本当に親子のようだと思うほどに仲がいい。

「そんなわけで、格安な土地は確かにあるぞ。どの辺がいいんだ？」

「そうねえ……できれば東門の近くがいいわ。貧民街にいた頃も東門側で暮らしていたし」

「東門側か。それなら……都市の東南東に開発途中に破産して、夜逃げした農業商会の土地があるぞ。あたり一帯はほぼ林で規模は二百メートル四方、四万平米くらいか。広すぎるだろうから分割

して——」

「いいわね、そこ。全部買うわ」

土地の分割販売書類を作成しようとするシュルヴェステルをよそに、ナデイはキラキラした目で宣言した。

一瞬動きを止めたシュルヴェステルはわずかに考え、やがて胡乱な目を向ける。

「——って、現地を見たわけでもないのに即決かよ。貴族や商会でもないのにどうするんだよ、その敷地面積。俺の家だって百平米で広い方なんだぞ」

「もちろんレオと一緒にあとで下見に行くわ。でも、希望どおりだから場所をまず押さえないと」
「押さええるも何も、処分したくても売れ残っている公有の売地なんだが……はあ、まあいい。押さえしておくよ」

言いながら、スカーレットに書類を渡して処理を進めるシュルヴェステルだった。

「買うのは止めねえが、相当広いし管理も大変になるだろう。大丈夫か？」

書類を処理しながらそう聞く彼の横で、満面の笑みを浮かべたナデイが小踊りする。しっかりとリズムを刻んだ上手な踊りだ。

感心すべき才能だが、書類処理をしている前でされたらうつつとうしいばかりだった。

「ダイジョブ、ダイジョブウ♪ なんともなるわ」

ついには頭上で両手を打ち鳴らし、そんなことまで言い始めた。すごく楽しそうだ。

それがさらにうつつとうしく、忍耐強いシュルヴェステルもイラツとした。

「土地を買ったらまず開発よね。伐採は……とりあえず魔法で根ごと木々を引っこ抜いて、処理しちゃおうかな。家はあるから、それを置くために基礎を作らないと。この世界って地面に直接柱とか置くのよねえ。多少手間でもベタ基礎でやったほうが強度も安定するんだけど……」

まだ手に入っていない土地の改造計画を立てながら、ナデイは一人でニヨニヨする。

「そうだ。土地を買ったってことは家を建てるんだよね。腕のいい職人を紹介しようか」

そんな彼女の話を無視していたシュルヴェステルが、当然のことを提案した。

ところが、ナデイは「何を言っているんだ」とでも言いたげに眉をひそめた。

シュルヴェステルが怪訝な顔をする。

「ん、建築は自分ですか？ どっちでもいいが、困ったらちゃんと見えよ。オメーはなんでも自分で解決しようとするからな。個人だとしてもならないときは、必ずある」

「そうね、それはそう。大丈夫よ、これでも身の丈は知っているもの。竜と戦って、嫌ってほど身に染みたわ……」

何かを思い出したのか、ナデイは伏目がちに呟いた。

オト、そして『剣花の天使』のタペストリーの絵を描いた人物などから竜退治のあらましを聞いていたシュルヴェステルはなんとなく事情を察したが、それ以上何も言わなかった。

「自力でやるなら止めねえよ。オメーのことだから資材は確保しているだろ」

「もちろん。ワンダリング・トレントの原木も残っているし。それにしても『神樹呪森』って本当
いい迷宮ね。さつきも言ったけど、【深層主】を乱獲しても魔物が枯渇しないもの」

【深層主】を討伐し迷宮を踏破すると、一定期間エネミーが出現しなくなるのが通常だ。

だが例外もある。自然発生型の開放型迷宮はまさにそれだ。

分類として『神樹呪森』は領域型迷宮にあたる。

しかしながら、もとは魔力濃度が高い森林が迷宮化した開放型迷宮だ。

よって領域型迷宮になったあとも、踏破した者が出てくても魔物が発生しなくなることはないため、他の冒険者に迷惑はかからない。ワンダリング・トレントも狩り放題だ。

ボスを狩りまくることそのものが規格外であるという自覚がないナディは、白い歯をキラリと輝かせてサムズアップする。

そんな彼女に胡乱な視線を向け、シウルヴェステルはクソデカため息をついた。呆れて何も言えないようだ。

「狩るのは勝手だが、他の冒険者に迷惑かけるんじゃないやねえぞ。あと素材を市場に大量に持ち込んで経済をぶっ壊すのもやめろ。限度つてものを知らねえのかよ、まったく」

「迷惑なんかかけてないわよ、失礼な。それに、もうワンダリング・トレント狩りはしていないわ。メイプルトレントを倒して樹液を採取しているだけよ」

「ん？ そうか。樹液は消え物だから問題ないか……それに、需要も結構あるしな」

メイプルトレントの樹液は食用で、甘味に使用する人気の食材だ。いわゆるメイプルシロップである。

「その他のドロップ品として、結構な毒素材が手に入るのよねえ。薬の材料にもなってるよ」

「待て」

ナディがサラッと、またしてもとんでもないことを宣った。

彼女はたびたびシウルヴェステルが使う胃薬や、その奥さんと子ども用の内服薬などを調べている。

「オメーが調剤をしているのは公然の秘密だから、もうツッコまない。だが、毒素材で何を作っている？ キリキリ吐け」

たびたび薬を調剤しては知り合いに無償提供していたナディだが、それを知った薬師ギルドから嚴重注意され、薬の無断製剤による損害賠償請求をされたこともあった。

だが、そんな彼女の薬は薬効が抜群で、現在流通している薬とは比較することすら憚られるほどの上等な代物だと判明して状況は一変。

薬師ギルド側から「製剤レシピを公開するなら、本件の責任を問わない」と提案されたのである。人のアイデアを盗むような真似に、話を聞いたシウルヴェステルは珍しく激昂したもののだが、当事者であるナディは「別に隠していない」という理由であっさり公開を許した。

ナディの言い分は「流通する薬の薬効が上がって、人々のためになるならいいじゃない」である。妹とは別のベクトルで懐が深いナディであった。レシピを秘匿するのに労力がかかって面倒という理由のほうが大きかったが。

もつとも、提供したレシピがあまりに難解で、開発は難航中らしい。

「はあ……あのねえ。毒は使いようによって薬にもなるの。傷が化膿しないように渡している抗生剤——薬があるでしょ。あれって原料は青カビなのよ」

「ふあ!？」

衝撃の事実には、シユルヴェステルがおかしな声を出した。

「それに、魔草ベラドンナの毒果実は強力な鎮痛剤の原料じゃない。それくらいは知っているでしょ？ もっとも、世に流通しているのは粗悪品で安楽死に使われているようだけどね」

「待って待って待って」

またしてもサラツとんでもない情報を出すナディを、まず制止する。

ちなみに、魔草ベラドンナの毒果実を材料にしての調合は難解だ。ゆえに製薬技術は秘匿されており、特別な許可と資格を得た薬師のみに許されている。

（痛みを和らげる製薬技術は失われなかったのね。それにしても、どうして私のレシピがなくなっちゃったんだろう）

三回目の人生で薬師として生きたとき、有用なレシピは一応残しておいたはずだ。

だが現在、それらの技術は失われている。それが不思議でならない。

「なんで『辺境の薬聖』の技術をオメーが知っているんだよ。どこかで製薬レシピを見たのか？ 薬聖の字がそもそも下手すぎて、ほぼ解読不能って言われている代物だったのに」

レシピが失われた原因が速攻判明し、思わず頭を抱えて赤面するナディであった。

そういうえば、残したものはあくまでもメモであり、自分が読む用の、走り書きですらなかったよ

うな字を書いた気がする。

それも無理のない話で、ナディがこの世界に転移したとき——一回目の人生では文字を覚える余裕すらなく、必死に生きていた。

二回目の人生では魔物狩りとして生計を立てていたため、文字にほぼ触れていない。

そして三回目の人生でやっと本格的に勉強を始めたが、意外と難しくて捗らなかつた。

最終的には、「どうせ自分用のメモだし」と判断し、この世界の言語と日本語が交ざった文章を書いていた。

（そりゃあ読めないわよね。後世の人に申し訳ないけど、それよりも恥ずかしい……レンテはよく解読できたわね。やっぱり天才だわ）

『辺境の薬聖』のレシピを読み解いていた、気弱で脳筋にトラウマがあるが、魔力運用の天才である『結晶鋼道』のダンジョンマスター、レンテを思い起こす。

それにしても、申し訳なさいっぱいだ。

ナディはきちんと読める字で書いたレシピ集を作るべきかと、本気で考え始めた。

「とにかく……今現在、オメーが知っている製薬技術をすべて書面に書き起こせ。薬師ギルドマスターのアラセリウスと精査する」

「え？ あ、うん。分かったわ。そんなにいいの？」

ちなみに、現在のナディの字はとても綺麗だ。

四回目の人生で魔王に呆れられたこと、そして政務に支障をきたすこともあり、王妃教育と並行

して必死に勉強したのである。

「それと。デカイ土地を買うのはいいが、支払いは大丈夫か？ ギルドの仲介を通せば、二割引になるが……」

冒険者ギルドに所属している中級者以上、つまりは等級が【銅級】以上の冒険者が土地と家屋を購入するとき、事前に申請すれば割引や補助金などが得られる。

「世知辛い話だが、冒険者稼業じゃあ分割払いが通るか怪しいぞ」

冒険者は収入が安定しない。等級が上級になるか、強力なスポンサーがついているかしない限り、信用が伴う分割払いは不可能だ。

そもそも一介の冒険者が購入できる土地や住居など、高が知れている。

間違っても雑木林を丸ごと購入しようとするとか、頭のおかしいことを考えるヤツはいない。

「あー……冒険者は分割なんて無理よねえ……支払いの信用問題的に……」

現実を突きつけられたナディは、ため息とともに頭を掻く。

どうやらそこまで考えが及ばなかったようだ。シュルヴェステルはそう考え、場合によってはギルドマスター権限で信用貸しを使うべきかと検討した。

「シルヴィ。ちなみにその雑木林がある土地つて、坪単価はいくら？」

「ん？ ああ、そうだな……坪単価は確か——」

件の土地は開発途中で放置されたため、再開発は手つかずの土地より難しい。

よって、驚くほどの安値になっていた。

それでもとんでもなく広いので、価格も比例して上がっていく。

敷地面積と坪単価を聞いたナディは、難しい表情で黙ってしまった。

（そりゃあ、そうなるよな）

シュルヴェステルは嘆息した。

いくら実力があるといっても、ナディはまだ十七歳。この世界の成人年齢が十五歳とはいえ、未成熟な少女として扱われる年齢だ。

そんな彼女が、それほどの土地を買えるほどの金銭を持っているわけが——

「買えるわね」

——あった。

「一括でいけるわ。どちらにせよ、土地を見てから決めるけど」

「おいおいおいおい、おいおいおいおいおいおいおいおいおいおいおいおいおいおいおい待って待って待って待って」

「え？ 何？ どうしちやったのよ、シルヴィ。まるで天国の扉な背後霊が憑いている、どこぞの動かない漫画家みたいに『おいおい』言っちゃって。羨ましいわね、私も言いたいわ」

「オメーの比喻表現はまったく分からんし、羨ましがられる理由も分からんが、とにかく。お前、マジで言っているのか？ どうやったら一括で出せるんだよ。高級木材を売り払ったとはいえ、そこまでの収入にはならんだろう？」

確かにナディは、飽和するくらい大量のワンダリング・トレントの木材を市場に流した。それこ

そ市場価格をぶつ壊すほど。

だがそれでも、土地を一括購入できるほどの収入にはならないはずだ。

「……おめー、何かやらかしてねえだろうな？」

悪い予感に苛まれ、シュルヴェステルは椅子からわずかに腰を浮かせて身構える。

胃がちよつとムカムカしてきたが、聞かなかったことにできない案件だと判断し、息を整えた。

「ほら。先日私とレオ、『結晶鋼道』に潜ってきたでしょ」

「いや初耳だが……遭難した迷宮にまた行くとか、どんな精神構造しているんだよ。オレなら絶対行きたくねえな。また氾濫に巻き込まれるかもしれないとか考えねえのか？」

『結晶鋼道』はもう何があるうと絶対に氾濫しないから平気よ。今は魔物の湧きだつて緩やかになっているでしょ」

『結晶鋼道』は、とある理由から魔力乱流が起きて溢れることがあった。

だが現在は原因そのものがなくなっている。今はレンテが迷宮を適切に管理しているため、魔物の出現数が減少していた。そのぶん鉱石の採掘量が微増している。

もちろんダンジョンマスターに関することは秘密だ。脳筋嫌いな引き籠りだし。

「ああ、そういやそんな報告があつたな。絶対に氾濫しないつてのは初耳だが……オメー、なんか知っているな？」

「で、そこで仕入れてきたわ。鉱石を」

「スルーかよ。まあ、言えないこともあるだろうから深くは聞かないし聞きたくもねえが。つーか、

またとんでもないものを仕入れてきたな」

ナデイのとんでも行動に慣れてきた、というか否応なく慣れざるを得なくなったシュルヴェステルは、盛大に呆れて言う。

それをどう解釈したのか、ナデイはいい笑顔になった。

「手に入れたミスリル鉱石と純ミスリル鉱石を、大量に卸したの。換金はただけど、じきに街の鍛冶工房に出回るでしょうね」

右手を胸に当て、左手を斜め上に差し出し歌劇調に語る。

シュルヴェステルはなんとなく、きつと褒められたと思っっているんだろうな、とナデイの思考を察した。半眼でため息をつき、げんなりする。

それを見ているスカーレットがぐつと両手を握り締め、口パクで「頑張れ」と呟くが、残念ながら伝わらなかった。

「まったく……相変わらず滅茶苦茶やつてるな。対応に追われる身にもなれ……」

ため息をつきながら、シュルヴェステルが愚痴る。

しかし、すぐに我に返った。

「おい待て。何を、大量に卸したつて？」

無意識に腹を押さえ、努めて平静に聞く。表情が一切ない。激怒一步手前である。

「え？ 人の話を何回も聞き逃がすなんて、本当にどうしたのよ。大丈夫なの？」

そんな感情の変化に気付かないナデイは、わりと本気で心配した。

彼にしてみれば、胃痛の元凶である人物に心配されても嬉しくない。むしろさらにイラッとする。「いいから言え。何を、どれくらい卸したって？ 報告がねえぞ」

「いやいやいやいや。何を言っているのよ、シルヴィったら。報告書が上がっているはずよ。自分でしっかり承認印を押しているじゃない」

言いながら、ナディはライティングデスクにある承認済みの書類を漁る。ほどなく、一枚の樹皮紙を取り出した。

確かに、ミスリル鉱石と純ミスリル鉱石買取りの承認書類だ。ギルドマスターの押印もある。ただし、その書類には量の記載がなかった。

それもそのはず。そもそもそれらが出回る量は限られているし、なんなら発注してから数年経ってやっと手に入るほどレアな代物だからだ。

「ちなみに聞くんが、どれくらい持ち込んだ？」

急激に痛みを増した胃のあたりを押さえつつ、せめて数百キログラム程度であってくれと願いながら聞く。

それに対してナディは……

「えーとねえ、ミスリル鉱石が五百トン、純ミスリル鉱石が百トンくらいかなあ」

とんでもない数字をものすごく楽しげに、それでいてやり切った感満載で報告した。

シウルヴェステルは思わず血を吐きそうになった。

「お……おま、おま……」

「え、おま？ あっ、お馬さん？ 馬はいらないかな。馬場とか厩舎とかも必要だし、何より飼料庫も必要で管理が大変でしょ。そうだ、土地を買ったら裏庭には二羽、庭には二羽のニワトリを飼うの」

「馬もニワトリもどうでもいいわ！ オメーはなんてことしやがるんだ！ 今度は鉱石市場をぶっ壊す気か！ さてはわざとか？ わざとやってんのか！」

「ええ？ 落ち着いてよ、シルヴィ。ちよつと何を言っているのか分からないわ」

「これが落ち着いていられるか！ オメーはいつもいつもいつも余計な仕事を増やしやがって！ そもそもそのマジックバッグはどんな容量してんだよ羨ましい！ 限界がねえのか!? 罰として仕事が終わるまで帰さないからな、覚えとけ!!」

「えー？ ちよつとお、奥さんの前で『帰さない』なんて発言はよくないと思うわよ。ロツティさんもそう思わない？」

「……ん、今のはナディちゃんが悪いかなあ」

「へ？ なんで？」

どうあっても自覚がないナディであった。

その後ナディは、スカーレットから静かな説教を受けた。感情的に怒鳴られ怒られるよりも、そのほうがより心に響くものだ。

結果的にミスリル鉱石は、鍛冶職人の技術向上と研鑽のため、公有資産から各鍛冶工房への現物支給という形で市場に出ることになった。つまり、ナディが自腹を切った形である。

純ミスリル鉱石は必要量だけ辺境都市に流通させ、残りは周辺都市や王都へと適正価格で販売した。

ナデイがとんでもなく大損したかのようなのだが、実際はそうでもない。

現代における純ミスリル鉱石はとても希少で、その売買では白金貨が飛び交う。

それが百トン。莫大な利益である。

ちなみに白金貨は一枚あたり一億ニアだ。

(今の純ミスリル鉱石の価格って、そうなのね。四回目の頃はありふれた鉱石だったけど)

回顧し、感慨にふけるナデイ。口に出したら、正気を疑われそうだ。

ちなみに、ミスリル鉱石に関して自腹を切った自覚は一切ない。

ちよつとした自己研鑽がてら手に入れたものだから、在庫一斉処分程度にしか考えていなかった。

その後、ナデイはレオノールを連れて、早速購入予定の雑木林の下見に行くことにした。

シウルヴェステルが同伴のうえ、スカレットが自前の馬車で案内してくれることになったので

ある。

実際は馬車ではなく、六本足で疾走するアーマリーザードが牽引する戦車である。

アーマリーザードの名前はガルディオスといい、なぜかナデイによく懐いた。

「ディオってばいい子ねー」

戦車を降りたナデイが、チロチロと舌を出し、黄色の虹彩を持つ鉄灰色のオオトカゲを撫で回す。

その様子に呆れながら、シウルヴェステルは言う。

「おいおい、ロツティの相棒なんだからあんまり可愛がるなよ。まったく、爬虫類までたらし込

むとか、何者だよオメーは」

「たらし込むとか失礼ね。いいじゃない可愛いんだから。それに、おかしな連中に懐かれるより万

倍もいいでしょ。ロツティさんだって何も言っていないし」

「ロツティがいいなら構わんが……つか、妹ちゃんと先に行つちまっていてねえじゃねーか。な

んで言い出したオメーが下見そっちのけで騎獣を愛でているんだよ。あと、ディオってなんだ？」

「愛称。『ガルディオス』だから『ディオ』よ……ふむ、いいわね。今度丈夫な石でできた仮面

も作ってあげようかしら……いや、謎の雄叫びをあげそうだからやめときましよう」

「相変わらず安定して意味が分からんな」

ナデイがよく言う謎の表現や比喻が一向に理解できず、慣れた調子で聞き流すシウルヴェステルだった。

地球の漫画が元ネタだ、などと説明したところで、彼には理解できないだろう。そもそもナデイには説明する気がないし。

そうしているうちに、ナデイは懐からあるものを取り出した。

「本当にいい子ねー、ディオは。はい、これあげる。よく噛んで食べるのよ」

「待て。アーマリーザードの主食は鉱石だぞ。おかしなもんを食わせ……おい、今、何を食わせ

た？　なんか青いというか、水色の石に見えたが？」



「アーマリーザードの主食なんて、知ってるわよそんなこと。今あげたのは、セレストアントから採れた鉱石よ」

サラッと、あまり一般的ではない魔物の名前を出すナディ。

もちろん、ギルドマスターであるシュルヴェステルが知らないはずはない。

とはいえあまりにサラッと言われたため、瞬間的な理解には及ばなかった。

よってわずかなタイムラグのあと……

「アポイタカラじゃねえか！ 何やってんだよオメーは！」

水色のインゴットをおやつとしてポイポイあげているナディに、ゲンコツを落とした。

「痛った〜……何するのよ。ガチムチな筋力で殴られて、バカになったらどうしてくれるのよ」

「うるせえわ！ □で言ってるからんヤツは鉄拳制裁が一番だ！」

「うわぁ……それ、場面が違えば問題になるヤツよ。私は賛成だけど」

説教しても効果がないヤツは、一定数存在する。よってナディも、基本的には彼の意見に賛成だ。

だがシュルヴェステルにとって、ナディは理解を得たい側ではなくゲンコツをしなければならぬ側に分類されている。

「ガルディオスの舌が肥えて、それ以外食わなくなったらどうしてくれるんだ!？」

「え？ 気にするところ、そこ？」

てっきり勝手をしたのを咎めているのだと思っていたナディは、高価な贅沢品ぜいたくひんをあげたことを怒っているのだと気付き、哑然とした。



後日。ナデイが購入を検討した土地をレオノールも気に入ったため、正式にここを買取ることになった。

土地を手に入れた姉妹は、引越しの話を聞いてお祝いに駆けつけたアガータさんと、大挙して訪れた貧民街の人々に手伝ってもらい、わずか三日で自宅を置く場所を確保した。

そこにベタ基礎を施して基礎を安定させ、以前ナデイが作り、レオノールが改良した結果、普段は異なる次元に収納されている戸建て——【次元拠点】を設置する。

その離れ業を目の当たりにした全員が度肝を抜かれてしばし沈黙し、ついで大歓声が湧いた。あたかも奇跡を目撃したかのような反応を示す人々にご満悦なナデイたちは、揃ってドヤ顔になる。

そしていい気分のまま、『結晶鋼道』で手に入れた大量の海産物を大放出し、食事を振る舞い出す。

これが人口密集地帯ならば文句の一つも出るだろう大騒ぎ。

しかしここは市街——都市の東南東の端であり、開発途中に放置された場所。周囲に民家はなく大騒ぎしても迷惑にならない。それが幸いした。

昼過ぎから始まった食事は、どんどん人数が増えていった。

場所が貧民街のある東門に近く、貧民街にいた頃の二人を一方的によく知る人々が集まったからだ。

こうして食事は長く続き、日が暮れてからは大宴会となる。

このときには、依頼をこなして帰還した冒険者や仕事を終えた冒険者ギルド職員までもが、いろいろ持参して合流していた。

参加者にはシュルヴェステルも含まれており、奥さん二人はもちろん、子どもたちまで連れていく。ラシエルもサラツと参加していたが、隅にいるためほぼ気付かれていない。

「……家は作ってあるって言うていたが、マジだったんだな」

何人が参加しているのか不明な大宴会を遠目に眺め、シュルヴェステルが呆れと現実逃避、そして感心がない混ぜになった声で呟いた。

呆れ七十%、現実逃避二十八%、感心は残る二%である。

陸揚げされた魚のような目になっている夫を、奥さん二人は困った笑顔で見つめた。

「ふふーん、だから言ったでしょ。たまには私の言うことを信じなさいよ」

渾身の力を込めたドヤ顔をするナデイである。

彼女の周囲には数十基のグリル用コンロがセットされており、半冷凍状態なフロート・ブルーホウエールというシロナガスクジラの巨大肉と、大量の海産物の山が鎮座していた。

シュルヴェステルは、それらとドヤ顔ナデイとを交互に見やる。

「常に信じがたい常識外れをやらかしている自覚がねえのが、一番の問題なんだが……」

何かを諦めたかのように、シルヴェステルが感想を述べた。
あたりではアガータさん家の長女が光の玉を宙に浮遊させて周囲を明るくし、次女が糸もなく操る一メートルほどの人形と、二振りの木剣を持った長男とが戦って遊んでいる。

それに見入っている己の息子たちを気にしながら、疲れを隠そうともせずにシルヴェステルは嘆息した。

こちらもありと常識外れな光景なのだが、それ以上を見慣れているため感覚が麻痺したようだ。

「ところで。なあ、ナディ」

「ほえ？ シルヴィが私を名前で呼ぶって、珍しいわね」

「あー、そういやオメーを名前で呼ぶ頻度は低いな」

「そうよ。まったくもう。でもね、シルヴィとの会話はちゃんとツッコんでくれるから楽しいわ」

「さよか。ツッコミどころしかないオメーのせいだが」

「ボケも大切なのよ」

「知らんわ。それより、気になったんだが……」

訪れた人々にナディがドヤ顔で披露していた自宅をしげしげと眺め、シルヴェステルが首を傾げる。その仕草に、彼女は怪訝な表情を浮かべた。

そして次に出たシルヴェステルの言葉は、ナディにとんでもない衝撃を与えた。

「こんなに広い土地を買ったのに、小ぢんまりとした平屋でいいのか」

「……………!!」

——翌日の早朝。ナディとレオノールは冒険者ギルドに無期限の休暇届を出し、どこへともなく旅立った。



「……それで、わたくしにどうしろと?」

ここは、神域クリテリオン。

その中心にある社の居間で、植物妖精のデシレアはきちんと正座し、緑茶を一口飲んでから聞いた。

表情はいつもどおりの穏やかな美人だが、言葉には困惑が滲んでいる。

「だからね、土地を買ったから以前作った家を置いたのよ。そしたらそれを見たシルヴィが『小さい家だ』って言うのよ? 失礼しちゃうわ」

ナディはふりふりしながら畳をペシペシ叩き、そう捲し立てた。

実際の発言とは異なるし、むしろ「小ぢんまりとしつつもいい家だ」とシルヴェステルは思っていたのだが伝わっていない。

「ごめんなさい、アイリス——ナディ。わたくし、その『シルヴィ』という人物を知りませんし、そもそもいつたいたいの話かも分かりません」